

※本書 123 頁に文字・図版の抜けがありました。
お詫びして訂正いたします。

給排気筒の規制(火災予防条例) (表3)

吹出し方向	鉛直全周 (cm以上)	斜め全周 (cm以上)	注1:(内は、防火板を取り付けた場合および「不燃材で有効に仕上げをした建築物の部分など」との寸法を示す 注2:上記に加えてメーカーの安全基準を順守する
上方	60(30)	60(30)	
側方	15	15	
下方	15	15	
前方	15	30	

ペレットストーブの分類(表2)

ペレットストーブ	半密閉式	自然通気型	煙突を使用し、通常電源を必要としない
		強制通気型	煙突を使用し、通常電源を必要とする
		密閉式	排気筒(給排気筒)を使用し、機器の排気

いわゆるFF式。設置や扱いが簡便であることから主流になると目されている

固形燃料の温風暖房機の規制(火災予防条例) (表4)

可燃物との隔離距離

上方	100cm	
側方	60cm	この規定に従うと配置にかなり制約がある
後方	60cm	

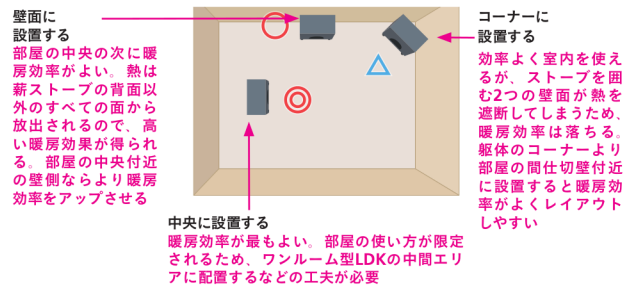
防火性能認証を取得している製品の例(サンポット製品)

上方	100cm	
側方	30cm	性能認証を受けている製品は隔離距離の制限が低く、設置しやすい
	17cm	
後方	19cm	

(FFP-471DF, FFP-701DF)
(FFP-811DF)

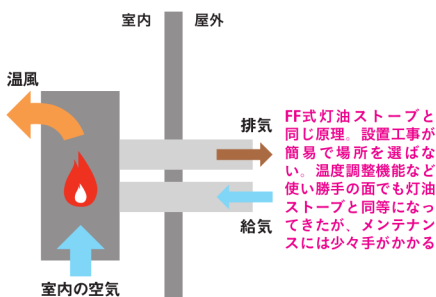
レイアウトで効率が変わる(図1)

熱源が1カ所しかないので、部屋ごとの温度むらができやすくなることに留意

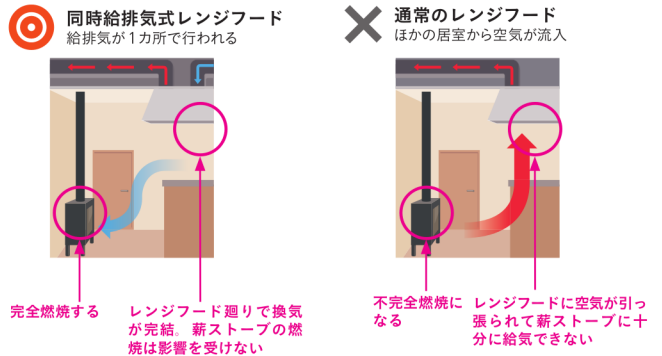


強制給排気型(FF式)

ペレットストーブの仕組み(図3)



薪ストーブには同時給排気型レンジフード(図2)



ない。趣味人でなければ継続使用は困難である。

もう1つは価格だ。廉価品の材工で70・80万円が相場とされる。特に本体価格の2倍と言われる煙突の施工費のウェイトは高い。さらに1年に1回は煙突内の本格的なメンテナンスが必要で、怠ると煙突内のタールに引火して煙突火災を引き起こすこともある。加えて、煙の問題だ。隣家からのクレームにつながる。設計上は内装制限を受けることへの留意と、図1・2のようにプランニングや換気との関係をきちんと計画することが必要である。

主暖房としては、郊外のお金持ちか趣味人限定の設備といえる。

こうした薪ストーブの大変さを一挙に解決したのがFF式のペレットストーブだ(図3)。若干の法規制があるだけで、配置の制約はほぼない(表3・4)。ただし、木が燃えて灰になる情緒的な楽しさは、薪ストーブに比べればだいぶ失われる。基本は灯油ストーブのようなものであり、機能的にも温度設定など、灯油ストーブ並みに便利だ。泣きどころはペレットの価格。灯油が高騰しない限り高くつく。メンテナンスは薪ストーブよりはかなり楽だが、灯油ストーブよりは面倒だ。灯油が高騰すると需要が一気に高まるだろうが、現状は中途半端なポジションだ。